

第2回 教育振興審議会議事録

20/9/29 13:30 生きいきプラザ

教育長挨拶

9月に入り多くの小中学校で運動会が行われ無事終了した。また、今年は狩野川台風50周年にあたり、各地で振り返る行事が行われ市内でも多くの児童・生徒・教諭が参加した。

給食費の件は議会に協議をお願いしているが、若干の値上げはお願いせざるを得ない状況にある。

教育に関することについて今回の審議とは直接結びつかないかもしれない件をあいさつとしてお話ししたが、教育振興審議会においては、慎重な審議をお願いしたい。

会長あいさつ

中国の孟子の母親は、孟子を育てるにあたり、教育にふさわしくないところを避けるために3つの都を渡り歩いたといわれている。

今回の審議においても、子どもたちの教育にとってふさわしい環境を整えるために、適切な学習集団の再編成が必要となる。

また、この審議が少子化への対応のためと消極的に考えるのではなく、地域にひらかれた学校づくりの理念のもと、審議をお願いしたい。そのためには、地域住民の意見や要望を十分に組み取らなければならない。

前回会議録の承認

事務局より前回会議録の朗読を行う

案内文としていただいた協議事項の項目と本日の次第の協議事項が異なっており、事前に学習してもらいたいというレジュメには、「学校再編成」という文言がはいていなかったため、何か意味があるのかという質問があった。事務局より説明を行う。

協議事項の各項目は、並列的な位置づけとして話し合っていく。

協議内容

- ・ 適正な学校規模、適正な通学範囲を具体的に決める必要がある。
- ・ 1学級25名、1学年2クラス以上が適正と考える。

・どのように活力がある学校づくりをしていくのかについて、地区との合意が得られればいい。

・適正な学習・生活集団として最低でも複数学級が必要である。その面からも現状の学級数は適正規模ではない。

・12の小学校のうち、10までの小学校が単学級もしくは、複式学級になっている。

・家庭的な雰囲気の中での学習は小規模校としてのメリットではない。

・小規模校（中学）では、専門外の教科を教えなければならずデメリットである。

・小規模校では、教職員の研鑽面からもデメリットがある。

・伊豆市の場合には、地理的な要件が関わってくるので、一律に児童・生徒数で輪切りにして決定することは難しい。

・具体的な学級数は、1学年2クラスもしくは3クラスがよい。

・クラスについては、最低限2クラスはほしい。1クラスでは、4月のクラス替えができない。クラス替えがないのは、子どもたちのヤル気にとってマイナスである。子どもが減っていくため、旧町内で小学校をひとつにすれば当面は複数クラスが確保できるが、それでも確保できない時がある。

ただし、旧町の枠を超えてまで再編成をする必要があるのか。できれば、現在の中学校区で小学校の再編成をしながら少人数のデメリットを補えるようにしていきたい。とりあえずは2クラスを確保したい。

・土肥小・土肥南小を統合し、複数クラスを確保したい。統合することにより特色のある学校にできればと思う。

・旧町内に中学校は1校ずつとなっているが、小学校も1校ずつでいいのではないか。

・事務局長より「伊豆市の学校統合の取り組みについて」次のように説明があった。

4町合併後、まもなく教育委員会で学校統合の話が出た。主たる目的は、複式学級の解消である。

平成18年度に複式学級が現にあったり、移行する可能性のある地区の学校統合について保護者から意見を聞いた。

大東小学校は、現に複式学級があり、土肥南小学校は、平成22年4月には複式学級が生まれる。

この2つの学校については、統合の方向で調整することを教育委員会で決定している。

ただし、伊豆市としての全体計画がないのではないかという意見が出ている。

平成18・19年度出生数が200人を切ったこともあり、単純に複式学級の解消だけでは済まなくなってきた。

通学区域についても並行して考えている。小規模校の保護者から近隣の小学校に通うことができないか照会がきたため、このようなケースに対応するため、学区の自由化を検討してきた。そのような経緯からも市全体の計画をまとめていきたい。

・土肥地区については、土肥小学校と土肥南小学校との統合が可能ではないか。土肥南小学校の保護者からも、通学方法を考慮してもらえれば統合は可能ではないか、という意見が出ている。

・活力ある学校づくりが非常に重要である。

・読み書きだけでは少人数が良いが、学校は、読み書きだけをするところではない。

活力ある学校は、すべてが揃って活力が出てくるのであって、児童・生徒数だけで割り切れるものではない。

・10年後には児童数が半減する。また、複式学級の解消も現状では困難である。

理想としては複数学級であるが、現実としては実現が困難である。

・旧4町が抱えているいい特色が、この問題の解決を困難にしている。広い学区にひとつの中学校というのは、よくできている。

・複式学級の解消だけに焦点をあてても何年後かには、再び同じ問題に直面する。

・10年先のモデルという意識で考えると、人数的には小学校は各学区に1校でいいという考え方も出てくる。

・再編成を何年先にするか、決める必要がある。

・老朽化している校舎や体育館の建て替えの問題を含めて合せて考えていかないと有効なお金の使い方につながっていかない。

・この話し合いは、小規模校を救うための話し合いでない。

・規模の小さな保育園の子どもは安定している。

・今、規模とか人数で議論を行っているが、今、一番危ないのは、「子どものころ」であり、人数のみの観点からの議論は危険ではないか。1クラスでは、何かにつけて順序づけができてしまうが、複数クラスであっても、1クラスの数40人近くでは意味がない。

・田舎の子どもたちも都会の子どもたちと教育環境は何ら変わらなくなっている。

・中伊豆中学校の体育館は、耐震強度がなく、地震がくれば倒壊する。

- ・効率的な税金の使い道を考える必要がある。
 - ・適正な1クラスの人数は、25人位と想定されるが、現実的には、その水準すら確保できない地区が出てくる。平成30年には、天城中学校でも130人になってしまう。その時にどうするか今から考えておく必要がある。
- 修善寺地区については、10年後もある程度の人数が確保されている。
- ・スクールバスの運営など、費用なども十分に考慮する必要がある。理想的なクラス人数、体育館・校舎の立替など現実的な数はすぐに計算できてしまう。
 - ・財政面から行政がどこまで対応できるのか、検討すべきである。
 - ・当面の対応として、複式学級の解消を第一課題として、10年スパン、6年スパンで考えていくのもいいのではないか。
 - ・どこに学校を置くか、極端な言い方をすれば現在の通学区域をとっばらってしまうことも考えられる。
 - ・理想的には歩いて通える範囲、小学校では具体的に2キロくらいか。過去の人間の情緒的な意識は排除して、これからの子どもたちのため、ただの手直し程度ではなく、真剣に考えなければならない。

・大規模が決していいとは思わない。小規模で地域の良さを経験することも大切ではないか。

・学校再編成により通学区域が広がると、メリットとデメリットの比較では、デメリットが圧倒的に多いように思うが、子どもの面、保護者の面、学校への負担などきちんと整理する必要がある。

・昨年度、伊豆市で生まれた子どもの数は170人であり、小学校は、修善寺地区に1校とその他の地区で1校の2校、中学校は、伊豆市内に1校というのが人数だけの上では、伊豆市の適正数であるが、通学面を考慮すると現実的ではない。

通学区域が拡大すると子どもの送迎の負担も大きくなる。